

みこころ

第18号

2011年
4月24日

発行元：

カトリック城北橋教会 広報委員会

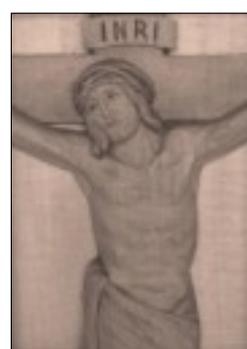
〒462-0847 名古屋市北区金城1-1-57

TEL(052)912-7123 FAX(052)935-2254

(HP)http://johokubashi.mikokoro.net



主は、受難と十字架の上の死を通して、ご復活されました。



INDEX ご復活号

「復活祭に希望の光りを祈る」 プリヨ・スサント神父 (p2)

「神学生日記」 片岡義博 (p3)

「イエスの聖心に最も近い時」 シスター林明恵 (p4~5)

「そっとしておいて下さいの心の中」 須藤ヨシ子 (p5)

「苦いパン」 城野道代 (p6)

「高齢社会はいけないことか」 片岡達哉・「過渡期にあるお葬式」 田口保 (p6~7)

「教会委員会から」「典礼委員会から」 平川正美・山田真義 (p8)

「日曜学校から」 加藤忍 (p9) 「投稿」 清水隆・後藤洋子 (p10~11)

復活祭に希望の

光りを祈る

主任司祭 プリオ・スサント

カトリック城北橋教会の皆さん、ご復活祭おめでとうございます。聖なる三日間のお祝いに、キリストの受難、十字架のご死亡と、ご復活がわたしたちの信仰、希望と愛の源であることを共に再確認したことができてうれしく思います。

しかしながら、今年の復活祭のお祝いに東日本大震災が引き起こした悲しみ、苦しみ、絶望感、などが重く押し掛かっています。二〇一一年三月十一日の九・〇Mの巨大地震とその直後の巨大津波の恐ろしさは、わたしたちの心に深く記憶されています。

に違いありません。わたしたちの心は、被災者とともにあり、大災害のために亡くなった方々の安息を祈りながら、被災者の皆さんが一日も早く自分の普段の生活を取り戻すことができるように祈り、助けになる行動を起こしたいと思えます。

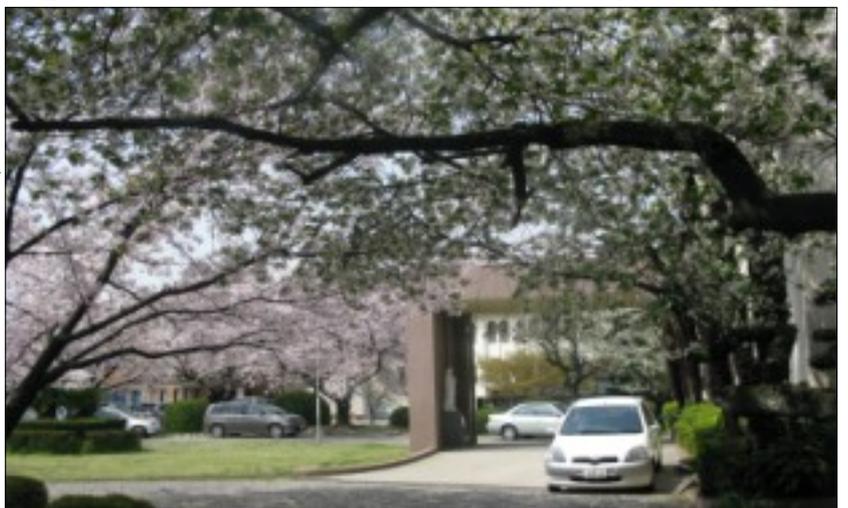


こんな世の中の状況にあつて、わたしたちは聖週間を祝い、復活祭を迎えました。わたしたちは、特に聖なる三日間の典礼を通してイエス様の出来事を記念しながら、主に對する信仰、希望と愛をとともに新たにしました。イエス様の最後の晩餐でご自分の体を

わたしたちの食べ物として渡されました。「これはわたしの体、とって食べなさい。これはわたしの血、受けて飲みなさい」(マタイ二六：二六―二九、一コリント一：二三―二五)。
また、実際に、イエス様はご自分を十字架の死に渡されました。これらの典礼を通してわたしたちは主の愛の大きさを味わうことができました。そして、復活徹夜祭の典礼を通して、光の祭り、

洗礼によって新しい命の誕生、人類の歴史における神の救いの計画とその実現、合わさって主の復活の喜びがわたしたちに新しく生きる希望がもたらされたのです。
主とともに生きるならば、たとえ時に、どんなに辛くても、誰よりも先に復活された主が必ず私たちを支え力つけてくださるとわたしたちは信仰しています。

復活祭は、わたしたちのキリスト教的信仰、希望と愛の再確認に最適なお祭りです。今、この世の状況におかれて、わたしたちは、キリスト者として苦しんでいる兄弟姉妹のために何をなすべきかを考え、キリストの心を自分の心にする勇気の恵みを願う必要があります。
特に東日本大震災の被災者の皆さんに希望の光が与えられ、すようきにキリスト者として祈り、いただいた神の愛を隣人にともに分け与えて生きたいと思えます。
復活祭、おめでとうございます。



ご復活は信仰と希望と愛の源です。

神学生日記

福岡の神学院へ ヨハネ片岡 義博

復活祭おめでとございます。去る二月二十六日に助祭・司祭候補者認定式が私と同級生の北村神学生の出身教会である金沢教会で行われ、野村司教様より正式に名古屋教区の神学生として受け入れて頂きました。そして学年はこの春から哲学科から神学科に進級して、神学院が東京から福岡に移りました。いま福岡市にある日本カトリック神学院福岡キャンパスで生活をしています。

この福岡キャンパスは二年前まで、福岡サン・スルピス大神学院と呼ばれ、九州にある五つの教区（福岡・長崎・大分・鹿児島・那覇）の神学校でした。戦後一九四八年の設立で、二万五千坪の広大な敷地に、設立当時からある四階建の昔の修道院

のような立派な建物で生活をしています。

この神学院で順調に進めば三年間、神学の勉強をしていきます。主に聖書学や、教義神学、倫理神学、教父学、典礼学、霊性神学、司牧神学、宣教学、教会史、教会法などの学問で、またヘブライ語やギリシャ語などの語学も学びます。

そして、福岡の方でも土・日曜日に司牧実習をさせて頂いています。私は福岡県行橋市（小倉から大分方面に各駅電車です十分ほどいった所）にある新田原（しんでんばる）教会です。毎週神学院から片道三時間かけて出かけます。教会の周辺は、一面果樹園と田園風景が広がり、野菜、米をはじめ、夏場から秋にかけては、桃・いちじく・な



しなどの果物が有名な所だそうです。

そんな地にある教会なのですが、驚くことに、なんとその教会には信徒在籍が千九百名もいらつしやるそうです。神父様の話によると、大正十五年に当初この地にトラピスト修道院があったそうです。そこを頼って、遠く、長崎の五島列島（特に上五島出身の方が多いようです）から信者が移り住み、この地を開拓して、自分たちで教会を建てていったそうです。ですから、福岡教区内でも特異な教会で、強い信仰をもった信者さん方が多い教会です。この教会で一年間司牧実習をさせて頂きます。またそこでの体験なども紹介できたらと思っています。

最後に三月十一日に発生した東日本大震災の災害ボランティアを、日本の司教様方のご指示により東京キャンパスで生活する助祭団（神学科四年生）十二名と養成担当司祭二名が、四月十日から復活祭の四月二十四日まで現地に出かけております。仙台教区のボランティアセンターを拠点に各地を回っているよう

灰の水曜日直後の三月十三日に回心のしるしとして、片岡神学生から額に灰を受けました。これから三年間、下の福岡キャンパスで神学の勉強をされます。

です。どうぞお祈りください。私たちがこの震災で被災地が大変な時に、この神学院で、普段通りの生活と勉強をさせて頂

けることに感謝し、毎日祈っていかねばならないと思っております。引き続き、お祈りよろしく願います。



特集

高齢者社会
に想う

昨年の九月二十三日に聖心の聖母会主催で「ケアする人のケアについて考える」という

パネルディスカッションが開催され、前のクリスマス号にその様子がレポートされていました。また昨年未だに教会の高齢者がどんなことで悩んでいるのか、そのニーズを探るためにアンケートが実施されました。そこで、この問題に教会共同体としてどう取り組んだら良いのかという想いで、企画をしたのですが、一般論では語ることの出来ない、現実的、個別的な問題があまりにも多く、立ち尽くしてしまうというのが現状です。それでも、何らかの話し合いの契機にはなるのかなあと思っています。青年からの投稿もありましたので、ご一読をお願いします。
(後藤明恵)

イエスの聖心に
最も近い時

林明恵 (聖心の聖母会)

日本社会において年金・医療・福祉・認知症や疾病・孤独・自殺・葬式などと抱き合わせて語られる場合の高齢者は、社会の弱者としてサービスを施す対象者として扱われる。教会においてはどうか。身体機能が低下し、気力は衰え、教会に行くこともままならず、他人に迷惑をかけないよう家にいるのが精いっぱいであるように見えたとしたら、その人は社会と同じように教会の弱者であり、司牧対象と考えるであろう。

若い頃熱心に宣教することができた司祭や修道者でも、今までのようにはいかず、人の手が

必要になる人もいる。それでは司牧の対象と見なされた高齢者はもう宣教能力はないのである。そして最後の時に秘跡(病者の塗油や聖体拝領)を受けることだけが救いの望みなのか考えてみたい。

「出会い」というのは本当に面白い。求めていた場合も、そうでない場合も、人生の旅程は人や出来事との「出会い」の連続である。追いはぎに襲われた人の横を通りすがったサマリヤ人の例えも「出会い」である。

思いもよらない巡りあい、自分の行く道が変わって来る。「出会い」は人間の範疇を越える。「見えない神の業の見えるしるし」、正に「秘跡」である。この秘跡につき動かされたサマリヤ人は襲われた人を引き取った。この「心を尽くし、思いを

尽くし、精神を尽くして」関わることが「永遠の命を受け継ぐこと」(ルカ一〇:二五―三七)、つまり救いに至ると語られている。

襲われた人も救った人も共に神の手の中で救われた体験をしている。これも「秘跡」といえるであろう。読者としては、祭司やレビ人が気になる。人の救いを専門にしているのに人を避けてしまった。この気まずい体験もまた、救いに関係していないだろうか。

この物語では、相手の病気の程度、「不幸度」「苦労度」「孤独度」(筆者造語)、また助ける側の専門の度合いが「救われる程度」や「宣教力」に反映されるといっている。そこに神が存在する「出会い」がなければ救いはなかった。そし

て、祭司やレビ人のように「出会い」の時を逃してしまったとしても、その時が又いつ来るかも分からない。行動に移す「勇気」が求められる場合もあるが、時として本当の自分を知る、神の時を待つ忍耐が「一番の「勇気」である場合もあるだろう。

高齢者の場合においても信仰の目で見れば、必ずしも個人の身体、精神、社会機能の低下が「弱く」「司牧対象」になるとは限らない。人間の価値観や常識では「弱い」と見えても、人生の旅程において神がちょうど関わられる瞬間ならば、むしろ強い時になるからである。

パウロの言葉「わたしは弱い時にこそ強いからです。」(二コリ一:一〇)を思い出す。人間には自分ではどうにもならない時があることが当たり前になるならば、「司牧の対象」という見方から「共に支え合って生きる存在」という見方になる。



マリア様は、いつも寄り添ってくださっています

先日、雑誌のAERA四月四日増大号に掲載されている山折哲雄氏(宗教学者)の記事を拝読した。東日本大震災関連の問題の中で、キリスト教の「苦しみから救おうとする」姿勢に日

本人として違和感を持ち、むしろ「苦しみに寄り添うべき」と語っていた。人間の力では人の苦しみや悲しみを取り除くことも、完全に共有することもできない、できるのは「寄り添い」「無常を受け止めていく」ことであるという。

イエスの聖心を生きたマリヤ様は、「寄り添い」の示唆を与えてくれる。遭遇する災難や窮地に立たされる状況にありながら「寄り添い」、限界がある中で「寄り添い」尽くし、女性として、母としての行動を止めなかった。彼女なら、一人一人の霊の旅路のペースを尊重して付き合ってくれるだろう。特別なことをしなくとも、必要なことには手を貸してくれ、よく聴く人だったであろう。

この世の旅路の後半にいらっしゃる方々の関わりで気づかされるのは、心身ともに健康な人よりも多くの「秘跡」が体験できることである。培ってきたものがそぎ落とされていく過程を刻一刻と感じ、未来が見えず、不安や悲しみ、自分と他者に過度の負担がかかる場合があるから、なおさら「無力」に感じるだろう。自分ではどうにもならない、だからこそ神の働きに気付きやすい。それはその人と神様との聖なる

時であろう。

このような状態に関わらせてもらえるというのは、何とも特別でたくさん恵みに気づかされる甘美な時でもある。しかし多くの場合、関わる側に忍耐と絶え間ない神への希求が求められるのかもしれない。

家庭での介護や専門職としての介護の現場では、目の前の現実や業務に迫られる。震災のような非常事態となれば生命を維持することに必死である。それでも人間のインシヤティブで救うことはできない。共倒れになつてしまふ。神のインシヤティブで関与される時、希望が見えないところ、希望が見えてくる。

両者にとって「出会い」そのものがどんなに、その人を生き生きとさせるだろうか。これが「出会い」を体験している信仰共同体ができていなければ、「秘跡」は正にクライマックスの時になるであろう。

それを、分ち合う時、思い巡らす時、日常から少し離れて神の時を思い出す場所、日常に戻るために自分を取り戻すための場所やそれを受け入れる人、これが必要であると感ずる。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。」(マタイ二二八)といわれる神様に逃げ場

を求めたい。

「そっとしておいて下さい」の心の中

須藤ヨシ子(聖マリア在俗会)

青空の下で教会の桜が満花となり、訪れる人にさわやかな喜びを感じさせている。こんなに自然が美しいのに、東日本震災の地震と津波は一瞬にして海辺の町々を根こそぎ廃壊してしまつた。また福島原発の放射能の問題は植物や仕事の上でも、とても重い問題を引き起こしています。ニュースを見るたびに胸のつづれる思いで神の助けを祈り続けています。

日本は固(もと)より諸外国からも次々と義援金やメッセーヂ、祈りもとどけられ様々な支援の輪が広がっています。特に若者達の行動力に感動しています。人々の心には助けたい、力になりたいとの熱い思いにあふれています。私たち教会共同体も互いの信

仰を深め合い育ちあつたことで、神の愛は交わりを通して信徒使徒職の豊かな実りとなつていくのです。しかし「そっとしておいて」と言われた方々の心の中に何かがある。

私たちは信仰の仲間としてどのように関わり合いその人の想いによりそつてきたらうか。私はしきりに反省しています。主に愛されていると言っていないから、その愛をどれだけ伝え分かち合ってきたか、赦しを請うばかりです。

高齢者だけでなく、小さくされている人、社会の中で疎まれている人々とのように接しているか、マザーテレサのように主イエスの名に結ばれて、イエスのみ心に結ばれて、イエスの心に目ざめて、表面的な関係ではなく「隣人を自分の様に愛しなさい」と語られたみことばに生

きていく。その愛は十字架に現れている、主に愛されて、自分を愛し人を愛する、そして自分を捨てるまでの愛が「そっとして」と言われた心を受け止めて、自分の心にぎざみながら私に何ができるか思いめぐらしています。

一人ひとりが主の愛をほこぶ者となるために具体的には先ず知っている方々、以前親しかった方々が電話、ハガキ、時には訪問して思いや話しを聴くことから始めてはどうでしょうか。また足腰の弱った人には車の送迎も考えられる。教会から遠のく方々にはそれぞれの原因があるのでしようが私たちの日常での関わりも大切と思っています。

それと共に洗礼を受けた後のアフターケアも大事と思えます。家庭での信仰生活、社会の諸々の出来事を福音の目で識別する手助けも出来ませう。

信仰が人に左右されることなく、いつも神に祈り語り、ミサを通して神との交わり、霊のよろこびを味わえるように互いに支え励まし合える教会共同体を目ざしたいと思えます。

主よ私たちの耳が、苦しむ人々の叫びを聴き取りますように。主よあなたの霊を今日も私たちにお与えください。マザーテレサの言葉に想いを寄せて アーメン



苦いパン

マリア・マグダレナ

城野道代

今年は珍しく四月下旬と遅い春の日に御復活を迎えた。

そして、アレルヤと祝つ前に稀有の大災害「東日本大震災」が発生し三月十一日以後、日本中の人々が息を止めてテレビに釘づけになった。信者はすぐに「ヨブ記」を連想したのではなかったか？

古い書棚から痛み止めの様に何冊かの本を出し読み返した。その一つに「別れの日まで」曾野綾子、尻枝正行共著の往復書簡がある。尻枝師の第一信を引用する。

カミユの代表作「ペスト」の一場面である。

「この世の闇と悪を象徴するペストがアフリカの平和な町を襲います。その夜もただ手をこまねいて立っている無神論者の医

者とイエズス会の神父の前で一人の幼児が悶え死にします。……説教壇に立つた時、神父は咳くように云うのです。『この子供たちの苦しみは私たちにとって苦いパンでした。でも、この苦いパンなしには私たちの魂は精神的に飢え死にします。』と……」

もう一冊も古い本で、かつて上智大学の心理学教授で、あの「夜と霧」の翻訳者として有名な霜山徳爾著「明日が信じられない」である。まさに今よみかえしてぴったりであった。

この災害の中にあつてこそ私達信者は忘れ遠ざかつていた信仰の原点に引き戻されたのではなからうかと思っている。

さて、本来のテーマ「高齢者」であるが、共通の問題でありながら、これほど個別なこともあるまい。

未熟なままにもう八十歳を越え、やっと、私本人が老いたのだと、納得出来る日々となった。実は私は周囲に殆ど老人の姿を見ない環境の中で生まれた。

中国の人たちの云う偽満州国は数年後に誕生するのでまさに新しい国造りの中で働き盛りの若者の姿ばかり目立つ国であった。

しかし、中国の本来の住民は古い家屋の奥深くひっそりと暮らしていたのである。

とにかくこうして一人っ子の私は二三年毎に転校しながら敗戦まで暮らした。

棄民されたとまでの思いを抱き引揚げのち、私は父祖の地日本をはじめて知った。私が老人問題に関心をもったのは四十年代になった頃である。

職業柄もあり、ずっと一貫して老いの問題は考え続けていた。広島での「生と死の会」設立の頃にはいささか働きもした。デーケン師と共にホスピス研修の旅でアイルランドも訪問した。

定年後はホスピスボランティアを、と志し、諏訪中央病院の研修に参加したが果たせずにいる。

今や与えるより受ける立場にと変わってしまった。

人を慰めることよりも、慰めを受け入れる方が、時にむづかしいこともある。

遅まきながら、自分の死を迎えるまでにすべきことをはじめよう。

身辺の整理をはじめ、死後のお世話をして下さる方のために、手順書も準備せねばならない。

通夜を省略した葬儀ミサや、広島長束カトリック墓地への納骨の事も全部お願いしなければならぬ事ばかりである。

せかされる想いではあるが、いくら自分の後始末をと思った



ところで、出来ることには限りがある。

今から、どうぞよろしく、とお願ひする次第である。

高齢社会はいけないことか？

レオ 片岡達哉

日本は高齢化社会だと中学や高校、また大学で当たり前のように教えられる。では教科書に高齢化社会とはどういう意味で掲載されているのか、高校の教

科書から引用したい。『国連は、総人口に対する六十五歳以上の高齢者の割合が七%を超えた社会を高齡化社会、一四%を超えた社会を高齡社会』と呼んでいて、『日本は一九九四年に一四%をこえていて、二〇二〇年には二九%を超えると予想されている。』という事は、現在五人に一人くらいは六十五歳以上の「高齡社会」なのである。

出生率の低さと医療の発達で寿命が延びたことで高齡化のスピードが世界の先進国と比較したときに二倍以上の速さで進んでいるといわれている。

そんな社会で疑問になるのが、「高齡社会はいけないことなのか」である。お年寄りが増えれば、年金が・・・とか、福祉に力を・・・などと、マイナスイ思考になりがちだ。そうではなくて、プラスに捉えることはでき

ないのか、と考えたときに城北橋教会の人たちを思い出した。

こういつては失礼なのかもしれないが、「高齢でもめつちや元気だし、とても六十五歳以上なんて思えないじゃん」とふと思ひ、「まだできることがたくさんあるのではないか」と考えた。私たちがより何十年と長く生きて得たモノを、未熟者の私たちに是非伝えて欲しい。学生と接する機会のある高齢の方はそついな。こんな時間があつたら、学校で受ける授業より為になるもの「生きる力」がいっぱいあるはずだ。

私が一番言いたいことは、自分が生まれたころから高齢化社会、いまさら考えたつてしかたがないつてこと。ただ「城北橋教会という一つのコミュニティの中で、年齢関係なく、みんなが力を合わせてその時その時にむかつていく」ことを目標にしたい。今を元気に、有意義に生

何処にあるのでしょうか？

僅かなパンと魚が増える奇跡物語りなど、聖書ではよく魚が登場します。また初代会ではキリストを表すのに魚をもちいていました。神の子である、救い主、イエス・キリストとい



もう一箇所この写真の魚があります。何処かな？

過渡期にあるお葬式 その変化の様相

洗礼者ヨハネ
田口保

きることは、何歳になつたつて一緒。みんなで協力していこう。もし、「私、こんなことを子供や学生に伝えてみたい」と少しでも思つた六十五歳以上の方がいらつしやつたら、どんなことでもお待ちしています！

高齢化社会とともに少子化がより一層進みつつあり、それにも増して社会の経済状況の疲弊がもたらす影響に、すべての人

が無傷ではおれない状況となつております。

家族構成もいわゆる大家族制から核家族化が叫ばれて随分久しくなります。死を迎える世代が平均八十才を超えている中、遺族になる世代が、六十才に達するといつことは、否応なく葬儀の小型化が進むとも思われ

ます葬儀が何故行われるのかをみると、死者の供養のためであり、残された生者への慰めのためであることにつきると思ひます。生者が死者を供養することに

式は整えられていくといえませんが、遺族の心を慰めるといつことがどれほど考慮されて組み込まれているか、疑問を感じざるを得ません。

葬儀では、社会的側面としての関わりがこれまで中心的なものとしてとらえられてきました。社会通念や廻りへの配慮が優先されている現状を批判的に抗議する形で、「死」に際して「故人の遺志」や「遺族の意思」を尊重する葬儀形式が増加しつづけるのも変化の表れといえま

キリスト教の本質的な原則は、キリストの「死と復活」を中心におきます。人間はこの世での生活を一旦終えますが、主の恵みにより、必ず復活して「父なる神」に連なる、すなわち、神の国で再会できるという確信があります。従つて、悲しみはあ

の信徒は「葬儀＝葬儀式」を礼拝として故人を主の許へ送り出す「祈りの場」と心得ています。それゆえに、信徒は大きに飾り立てる葬儀はしないのが普通です。

日本での現状をかいま見ると、旧来の伝統的な慣習に基づいて「家の宗旨」や、「故人」の「最後」だからという「声」に流されて、望んでもいない形の葬儀が、多く執り行われているのではないかと懸念をいだかざるを得ません。しかしながら、近年ようやく「葬送の自由」を求める声徐徐に高まつてきました。背景には日本でも個人主義・自由主義といったものが、浸透してきていることと理解されましよう。

多くの人たちが、葬儀のあり方に疑問や不満を抱いてきました。そこから一歩進んで、みんなが「死者を供養するとはどういふことか」というテーマと、ようやく向き合わざるをえなくなつているところではないか。葬儀にとつて「要らないものは要らない」といふ方向に、急速に舵が切られようとしている。お金ばかりかかつて魂のこもらない葬儀と、決別しよう。

お断り 大変興味のある田口保さんの文章ですが、紙面の都合上、次回にこの続きを掲載させていただきます。

教会委員会の現状

ヨゼフ
平川 正美

城北橋教会委員会と言つ名稱で、教会運営や司牧活動等の協議が行なわれております。この委員会の運営方法に関しては、毎月一回第三日曜日に定例会と決めて開催されます。

委員会への出席者は各部会、専門委員の方々が招集されて会議が行なわれています。但し必要に応じて主任司祭と信徒会長が招集して臨時に委員会を年何回か開かれております。

構成員は主任司祭初め修道者、各部会、専門委員、福音館担当委員、名古屋マツク担当委員、教区関係では、一粒会委員、正義と平和委員会委員の各代表者が出席されます。

委員会の目的はカトリック教会の教えに基づいて、司牧活動、教会運営に関する事柄等を協議をし、委員会へ提出された協議事項に関して各委員より意見も聴き、検討、実施、推進すること

とを目的として毎月教会委員会が開催されています。

教会委員会の会議の内容については、信徒会長が進行役になり、会議が進められ、まず主任司祭のはじめの祈りと挨拶があり、本題へと移って行きます。

まず、一ヶ月から二ヶ月先の教会行事日程や、その内容等に関する事等の確認、協議事項に入りますが、四月教会委員会では、四月十七日に教会総会を行なうにあたり、総会の準備について、協議事項で、各部会、専門委員、教区各種委員より活動報告と十一年度における年間行事予定について、各委員から意見を聴きます。

つぎに「みこころバザー」の開催については、今年は東日本大震災で被災者の方々へバザーの収益を充てることを目的に開催したらどうかという、委員からの意見がありました。よって本年も六月に開催することが決まりました。

その他では委員より復活祭のミサ後、祭壇の前で集合写真の撮影をしたいたとの質問があり、協議の結果、賛成多数で決まりました。このような内容で委員会が行なわれています。また協議の結果、継続して次回の委員会において再協議される事項もありますし、内容によっては今後の検討課題として協議が続く

こともあります。

協議事項に関しては、事前に信徒会長より主任司祭の意見を求めて、委員会での協議事項として提出されております。

教会内の活動は、活動を調整することや教会の働きの中に信徒を積極的に参加させるように努めること及び司祭・修道者・信徒間のコミュニケーションの為の伝達、情報手段となることや、当教会と教区レベル（城北プロック会議、教区信徒協議会、教区宣教司牧評議会）の組織との連絡調整をする等の活動もしています。

委員会の全報告内容に関しては教会総会の時に各部会及び専門委員より活動報告がされております。このように年間活動が行なわれていますが、教会共同体の中において、たくさんの方々が教会奉仕者になることを望みます。特に男性の方は、獲る者は多いが担い手が少ないので、このことを信徒皆さんでより良い考えが見つかることを願っております。

典礼委員会の活動状況

ペトロ 山田真義

毎週の主日ミサ前の準備・ミサ後の片付け
当番制でミサの準備、ミサ中の座席案内
典礼奉仕者（朗読・奉納・司会）等のお願ひ
奇数月に典礼委員会開催
行事予定の確認等の話し合い

活動報告
三月六日（日）灰の水曜日に使用する灰の準備（枝焼き）
三月二十一日（祝）教区典礼研修会参加
葬儀のご案内の内容を数ヶ月かけて確認を行い、降誕祭



大笑いの新年会(1月23日)



青年部のビンゴ大会などで毎年、盛り上がる新年会は、今年は特に楽しく、大笑いで新年のスタートとなった。酒井佳子さんのひきいるダンス・パフォーマンスはリィダーが巧みに観客を誘い、大人も子供も飛び入り参加、夢中になつて楽しそうに踊りまくっていた。最後に戦場カメラマンまで現れ、「一体、これはなんなんだ?」と古稀の老人は口をあぐり。

から皆様に配布しました
五月八日のマリア祭にマリア様のみこしを作りたいと思ひマリア像を新しく発注しました

典礼委員会でも話し合われますが、典礼委員会企画の勉強会を開催したいと考えています。自分には典礼委員じゃないから関係ないよと思わないでください。信徒のみなさんに何かを学んでいただけならいいなあと思つて企画したりしてみてください

日曜学校から

フランシスコ・ザベリオ
加藤 忍

日曜学校はミサの前半、シェバリエ館二階にて小学生はみこころの分かち合いを行い、幼児クラスはお祈りのしかたを覚えたり、神様やイエス様のお話をしていきます。

ミサ後、小学生は低・高学年に分かれてカテキズムを行っていきます。また、毎月第二週は典礼奉仕としてミサの担当を行います。

今年度の大きな行事として、四月の遠足、五月のマリア祭・教区教会学校の集い、六月のみこころバザー。夏休みにはサマーキャンプ、クリスマスミサでの聖劇などを行う予定です。

そして六月の聖体の祝日には初聖体を予定しており、対象となる子供達が一所懸命勉強しております。

そのほかにも様々な行事にも参加していく予定でありますのでご支援ご協力の程よろしくお

願いたします。

日曜学校でどのようなことをしているのか興味のある方は是非見学に来てください。

スタッフも随時募集しておりますので詳しくはS r林までお問い合わせください。

さて、ここからは個人的な思いを少々・・・

今回の小教区報「みこころ」のテーマが『高齢者社会に思つ』ということ、この城北橋教会

も高齢化が進んでいます。いえ、城北橋教会だけでなく、名古屋教区・日本の教会自体が高齢化を迎えています。これは、日本の人口統計を見ても明らかです。

ですので、これからは高齢者に頑張ってもらいましょう・・・というわけにはいかず、やはり、青年・子供達が教会を支えていかなければならないはず。

では、教会に青年や子供たちは来ているのでしょうか。幸いにもこの城北橋教会には多くの子供達がきています。しかし、安心はしないで下さい。子供たちと話をしていると決して安心できる状況ではないのです。

大人の立場からすると教会に子供達がきているだけで安心してしまふのですが、子供たちの本音を聞くと、「教会はつまらない」、「ミサが退屈だ」、「子供会のほうが楽しいから教会に行かない」などという言葉

をよく聞きます。

ある司祭が次のようなことを言っておりました。

「子供に教会を好きになってもらわなければならぬ。そうしなければ子供たちは教会に来なくなる。」

この城北橋教会の子供たちにも教会を好きになってもらうことについていろいろ考えております。

主任司祭であるプリヨ神父様

いでしょか。

子供達が教会に来なくなる理由の一つとして教会に知っている人(話したことのある人)がいないというのがあります。

大人でも声をかけることは勇気が必要な事です。もし一人で声をかけづらい時はシスターや日曜学校のリーダーに声をかけてもらっても結構です。子供たちに挨拶や声をかけつつけてください。

大道さんが、何時の間にか、水彩画を描き始められていた。息子さんが使い残した絵の具を使つてのスタートだったようだ。

透視図法のほか、色彩による空気遠近法もすでに勉強されたとのこと。

今回は、数年前に旅行された、アッシジの風景を二点出品されていたが、いわゆる水をたつぷりつけて、さつと描くという技法ではなく、丁寧に、細部まで描いておられます。クララやフランチェスコにまで想いを馳せての作品でしょうか。

静かな、落ち着いた雰囲気的印象的でした。残念ながら、ガラスに天井の灯りが反射して、良い写真が撮れませんでした。今後の活躍をいのります。(後藤明憲)

第11回明成展(4月5日~10日)

マリア・ローザ 大道 紀美子さん



映画「ヤコブの手紙」を観て アウグスチノ 清水 隆

去る二月教会の掲示板に案内が貼り出されていて、中日新聞にもシネマガイドが載った。それを抜粋してみます。『フィンランドの片田舎、刑務所を出た女性レイラは、盲目の老牧師ヤコブの元に身を寄せる。仕事は牧師への相談の手紙を読み、その返事を書くこと。かたくななレイラが心を開くのは、手紙が途絶え、「私は必要とされていない」とうちひしがれる牧師に自分と同じ孤独の影を見たとき、手紙を読むふりをして打ち明け

る過去は・・・』
牧師のベッドの下はすき間がないほどぎっしり手紙の束が積まれている。手紙の代読、返書の仕事をレイラはいやいやながら、「家事はしません、長くは

いませんから」と冷たい。
ある日から手紙がバタッと来

なくなる。老牧師はもう人々からも神からも必要とされていないのかと深く落ちこんでしまっ

た。妄想にとらわれ、来もしない新郎新婦を荒廃した会堂で待ち、洗礼式だったかと一人で言い、疲れてその場で眠ってしまう。それを見たレイラはもう自分も限界かと自殺を図ろうとします。台に立ち首に縄を巻くとき眼に入ったものは雨漏りでした。その水滴は牧師の大切にしていた手紙の上に落ちていたのです。レイラはハタと手を止め首の縄をゆるめたのです。自分と同じ孤独な老牧師のためにもう少し手助けをしようと思っただけです。

ある日久し振りに自転車の郵便配達人が来ます。手紙ではなく雑誌でしたが牧師が顔を出し、いつもの庭の椅子に座りレイラの読みを待ちます。レイラが語ります。「ヤコブ牧師様、私は姉の夫が姉に暴力を振るうのを見ました。疲れたら休んで、また殴り続けるのです・・・私はたまらずナイフで刺しました・・・姉は夫を愛していました。その人を私は殺してしまつたのです・・・私は許されるのでしょうか・・・」
聞いた老牧師は「その差出人はレイラか」と、「そうです」とレイラが答えると老牧師は、「神様には何でも出来るんだよ」「お前に見せたいものがある」と家に入り十数通の手紙を持ってきてレイラに手渡します。お

聖書問答シリーズ 問答保

問) 仏式では、死者に経帷子を左前にして着せますが、キリスト教でも同じようなことをしますか
答) イエスが埋葬される箇所を見てみましょう。四福音書(マタイ27:57~、マルコ15:42~、ルカ23:53~、ヨハネ19:38~)にイエスが死んで埋葬される様子が描かれております。そこでは香料を添えて亜麻布で包み墓に納めたと書かれております。

亜麻布で包みと記されているように、左前・右前もありません。わかりやすいえば、ミイラが布でぐるぐる巻きにされている状態ではないですが、日本でみるならば生まれたての赤ちゃんを抱いて(おくるみで)、冬季外出をする姿を想像してください、そのような状態で墓に埋葬されたのです。

経帷子を詳細に見ると、帷子とは麻または木綿の白い単衣のことで、死者に着せる帷子には、教典の文句や仏の名前、梵語を漢字に音写した文句が書き入れてあるので経帷子と呼んでます。死装束としての経帷子は、死を穢れ、不浄と考え、死を恐れたことから、日常と違って左前にする決まりとなっております。経帷子は、死者の近親者や近所の人たちが寄り合い、幾人かで仕立て上げていき、布を切るときもハサミは使わず、手で裂き、返し針もせず、糸尻をとめず、玉結びをしない。また、脚絆や足袋も片一方ずつ別な人が造ります。このように、葬式では普段しないことや反対のことを行います。

これに対して、キリスト教では、死は神の恵みにあずかる入り口といえることからこのようなことは行われません。また、行う必要もありません。衣類を着せる場合は、生前と同じように着用すれば結構です。

だやかな笑顔で「これを読みなさい、私は部屋でコーヒィを入れて待っているよ」と。手渡された手紙は姉からのものでした。「親愛なるヤコブ牧師様、今日もまたいつもと同じ事を書きませんが、妹は面会に行っても会ってくれません。私は妹が元気ならそれで良いのですが、恩赦をお願いしていただけませんでしょうか・・・」

手紙を読むレイラは涙、涙です。私もまた込み上げてくるものを押さえることは出来ませんでした。牧師館に入って抱擁をと思ったでしょう、しかしレイラが見たのは床に横たわる老牧師でした。最後の仕事を終えて

寺本敏さんの 思い出

フランススカ・ベドルーナ

後藤洋子

大震災後しばらくは聴く気が起こらなかつた車内のオーディ

天国に召されたのです。出棺を見送るラストシーンはレイラの手には姉の手紙がしっかりと握られていました。映画を観終わって心に染み込んできたものは、生への賛歌と神への賛歌でした。

お二人とも知的で、柔和で、奥様はいつもお手製のセンスの良いお洋服をお召しになり、ご主人はソフト帽や毛皮のロシア風の帽子が似合うタンディな方で、憧れのご夫婦でした。

お話をするようになったのは、結婚して、黒川の市営アパートで生活をスタートした少し後の

ことです。寺本さんご夫妻は、今の私達と同じく50歳の年齢だったでしょう。アパートの直ぐ東隣に寺本さんのお宅がありまして、平屋の簡素なお住まいを、ぐるっと広いお庭が取り巻いていて、季節の花々が咲いていました。玄關には姿の良い大きな、さるすべりの木と、少し離れて五月頃、鮮やかな緑の葉の間から、白いモヤモヤとした花がいつぱいついた、高い木がありました。散歩の帰り道、玄關でお会いして「見た事もないこの木の名前は何ですか？」とお尋ねすると、「なんじゃもんじゃの木というのよ」と教えていただき、面白い名前に、子どもも私たちも、一度で覚えてしまいました。今ではあちこちで街路樹になっていますが、当時は寺本さんのお宅でお目にかかれない珍しいものでした。

もう十数年前になりますが、敏さんの故郷、岐阜の女学校を訪ねるドライブをしたり、犬山市の「なんじゃもんじゃ」の自生地を一緒に巡り、帰りに「田楽」を食べたりした時のことが、懐かしく思い出されます。

私は「みこころ」に毎号掲載されていた寺本さんのエッセイを楽しみにしていて、神父様の巻頭文の後は、すぐに寺本さんのページを開いていました。日常のちょっとしたエピソードに

は、ユーモアと温かさのなかに、ちよっぴり批判的精神が添えられていて、名文家でした。さもありません、犬山行きの後、しばらくして日本自分史大賞奨励賞に入賞され、立派な本になりました。



受賞された日に
ルカ 寺本敏さん

幼児・娘時代から、妻・母親の時代まで、たくさんのエピソードで彩られています。面白く



て、一気に読んでしまいました。私の母と比べても詮無いのですが、寺本さんとの共通点は、共に医師の娘として誕生し、私たち娘世代には想像もつかない波乱万丈の娘時代を送ったことですが、生き方は正反対。当時の女性の立場は弱く、封建的な世にあって、多くの場合のように、私の母はただただ家の定めに従い、逆らうことなく生きてきました。寺本さんは、はっきりと自分の意思と意見をもち、時には真実を求めて行動する女性だったのです。

本題「たのしみは 生きていくこと」は、晩年に目が見えなくなり、耳もほとんど聞えなくなつたご主人に、「生きていて何が楽しみか」と聞いた返事だそうですが、夫婦の歩みも紆余曲折、でもご主人も受洗され、その目となり、足ともなつて、お二人は片時も離れず寄り添つておられました。ご主人を主の元へ送られてからいくらかも経たないうちに、今度は最愛のお嬢様が不治の病に倒られました。つききりの看病の甲斐なく先立たれた辛さは、いかにばかりかと察せられました。寺本さんは、喜びも哀しみも乗り越えて、「たのしみは、生きていくこと」と神様にゆるぎない信頼と希望を

おき、常に凜として穏やかなお姿でした。名古屋に戻られた、末のお嬢様と、仲良く暮らしておられたが、歩行が困難になつて「フアミーユ黒川」に入所されました。それでも、生きていく喜びを、素晴らしい笑顔で表して、毎日訪ねて、お手伝いをされていたお嬢様やスタッフの方に、元気をプレゼントされました。本の目次の下にこうありました。「わたしの一生は負の生涯。でも、つかむものは、つかんだと思う」と。尊敬してやまない寺本さん、さよなら、有難うございました。

四月十七日、枝の主日のミサ後、二〇一一年度の総会が行なわれました。

各部、各専門委員からの報告があり、教会と信徒会の会計報告も拍手のうちに了承されました。

四月十七日、教会総会を開催

新役員に荒木、加納、岩月さん

れました。

一粒会の清水さんから、「片岡神学生のことを義君と気安く呼べなくなりそうですよ、今の内に一粒会に入らないと、喜びの日にはお招きがありません。

せんよ」とのユーモア溢れた報告にシーンとしていた会場が爆笑に包まれました。

新役員は壮年部の副会長に荒木量也さん、女性部の副部長に加納邦子さんと岩月陽子

さんが夫々就任されました。

新役員になられた三人の方は、大変ですが、どうぞ宜しくお願いいたします。女性部の小川さん、山本さん、本堂にご苦労様でした。

また日曜学校のスタッフに、小林真衣さん、大石真里亜さん、大石亮介君、それに高木弘治・鈴子さんのお孫さん、水谷まどかさんも加わってください。皆さんも応援してあげてください。

日曜学校は教会の宝だといふ言われますが、地方の教会では本当に子供の姿がみえず、侍者をお爺さんがしている教会も珍しくありません。

シスターやスタッフの方に感謝するだけでなく、加藤忍君が云うように、大人も子供に話しかけ、名前を覚えましよう。

(後藤明憲)

信者動向

【洗礼】

二月六日

ミカエル 河崎 大亮

【転入】

二月十五日

長崎教区 桐教会より

ドミニコ 下田 学志

名古屋教区 七尾教会より

アウグスチヌス 桑原 由樹

【転出】

一月十五日

名古屋教区 刈谷教会へ

アピラのテレジア 吉田 愛子

三月六日

パウロ 植園 聡都

【結婚】

三月二十六日

アウグスチヌス 桑原 由樹

桑原 香奈

【帰天】

一月十七日

ドミニコ 二股 福三郎

(八十四歳)

一月二十二日

ルカ 寺本 敏

(九十九歳)

二月二十八日

パウロ 堀沢 八郎

..... (八十二歳)

【新成人】

マリエッタ 恒川 藍

レオ 片岡 達哉

藤田 裕也

テレサ 小野 奈美子

彼らの上に豊かに聖霊を送ってください



小野さん、藤田君、片岡君、恒川さん プリヨ神父様も見守って下さっていますよ

編集後記

思いを巡らす四旬節であった。今の日本を作った来世の私達は、後始末までも次の世代に任せてはならない。自分の背丈にあった生き方に転換する時が来たのだ。最後にお断りしますが、文章には筆者名を記し、記述の責任を明らかにしております。それはカトリックの公式な見解と異なる場合もあり、個人の意見であることを明記するためです。

(後藤明憲)

デーケン神父の「死とどう向き合うか」とか、里脇枢機卿の「カトリックの終末論」(聖母文庫)などで、死を身近に感じていくアプローチ、あるいは信仰を深める要理として、今まで死を学んできたが、オリエンス宗教研究所の「キリスト教 葬儀のこころ」を最近になって読む機会があり、自分の死からではなく、愛する人をおくる側からの視点に、人の死の本質を学んだような気がしたので、内容を少し紹介したい。

葬儀のこころ



死は神のみもとへの凱旋であり、新しいいのちに生まれる日として、教会は聖人の祝日を帰天の日としてきたように、葬儀は希望と喜びを与えるものであった。だから復活を象徴する白色が典礼色だったのだ。ところが中世の教会では、煉獄思想の影響で葬儀が死者の罪のゆるしを願うものという面が強調され、典礼色も黒に変わってしまった。

しかし免償に対する批判も根強く、第二ヴァチカン公会議で復活に裏打ちされた古代教会の希望に満ちた葬儀に改定され、アレルヤ唱や復活のローソク、典礼色も白というように典礼意章が改められたのだ。が、復活の信仰と希望を持っていても、罪深い私たちは葬儀ミサを通して罪がゆるされ、永遠のいのちにあずかれるように祈らなければならぬのも現実である。そのためにも、死の瞬間に心に向けて、ゆるしを願い、自分をゆだねることがとても大切なことになる。だから、病者に死が近づいたら、たとえ認識できない状況に陥っていても、司祭に連絡し助けを願わなくてはならない。このことは、家族の中で自分だけが信者であるような場合には、近親者に特にお願い

しておいて欲しい点である。一方、高齢者の中に、人に迷惑をかけたくないと思う人が大変多いのも事実だ。もちろん、その上に経済的な問題も重なり、生前に自分の死後を考え、葬儀はしなくてもいいと考える人が増えてきているのだ。

しかし、死はその人のものだけではなく、遺族や、属していた教会共同体のものでもある。だから、その人と親しかったからだけではなく、たとえ会ったことが無い人でも、同じ信仰を

持った人として、葬儀ミサに参加し、故人や遺族のために祈ることは大変大切なことである。使徒信条の中に「聖徒の交わり」という言葉がある。カトリック教会のカテキズム1475によれば「信者たち 天上の祖国にある人々、清めのために煉獄にある人々、まだこの世の旅路にある人々 の間には、愛の不断のきずなとあらゆる善の豊かな分かち合いが存在します」とあり、天国、煉獄、地上の信者の間には交わりがあるとされているのだ。「わたしにつながっていないさい」(ヨハネ15・4)というイエスの呼びかけの中に、死を乗り越えて永遠のいのちに至る希望があるのだ。

だから、イエス・キリストの十字架の死と復活を記念するミサの中で、死者のために祈っているのは、煉獄で清められている人が一刻も早く、永遠の命が得られるようにということと、今は父なる神に迎え入れられている人々が、地上にいる私達のために、力づけてくださるようにと祈るためである。

毎年行なわれる八月の合同慰霊祭で、プリヨ神父様が「天上の共同体と地上の共同体が一致して永遠のいのちを約束された神様を賛美するのです」と言われたことを、あらためて噛み締めている。

(後藤明憲)